とある。

この海戦は巨済島沖で行われ、日本水軍が初めて朝鮮水軍を破ったのであった。ここに慶尚道沿岸から全羅道順天までの制海権を握ったのである。

八月には、宇喜多秀家を総大将とする五万六八〇〇が全羅道の南原を、毛利秀元を総大将とする二万七〇〇〇が全羅道の全州を攻めた。

日向記に南原城の戦いがある。

「(慶長二年)八月十三日取巻、十五日之夜責崩、其方手前首数十七討捕之旨候、即鼻到来粉骨之至候」

この内容で重要なことは、敵の首と鼻を名護屋(豊臣秀吉の下に)に送ったことにある。

文禄の役では日本での合戦の風習に従って、首が送られていたが、慶長の役が始まると、豊臣秀吉は朝鮮在陣の諸将に鼻を斬って首に代えることを命じたのである。

「大将ナレバ、首ヲ其儘、(その他は)ことごとくク鼻ニシテ、塩石灰ヲ以ッテ壷ニ詰入、日本ニ進上」と。

つまり、敵将など身分のあるものは首、その他はことごとく鼻を削ぎ取り、塩石灰に漬け、日本に送り手柄の証拠としたのである。

この「鼻斬り」は南原戦で開始された。

南原城、全州攻めなどの二ヶ月足らずで、斬り取った敵の鼻は三万にも達しているとも言われている。

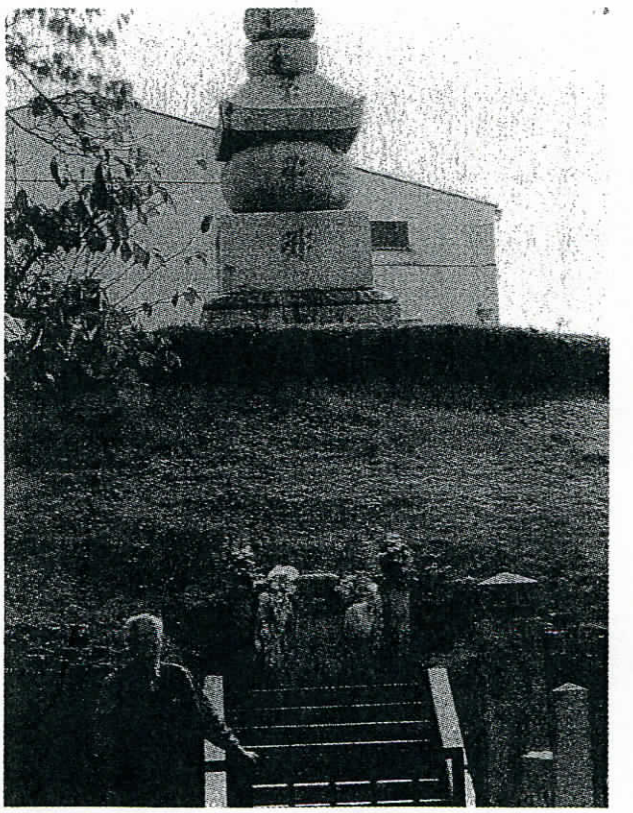
また島津家記には、泗川新城の戦いで明・朝鮮軍三万八千余を討ち取り、この死体から鼻を削ぎ取り、十個の大樽に塩漬けにして、豊臣秀吉に送ったとある。

この鼻には民間非戦闘員を対象とした残虐行為で得たものもあったと指摘されていた。

「鼻斬り」の数は十万を優に超すと考えられる。

京都善光寺(現豊国神社)前に塚を築いて、朝鮮から送られてきた鼻を埋め、施餓鬼を行っている。

耳塚



慶長の役では、日本の軍勢は慶尚道、全羅道、忠清道を約二ヶ月間で席巻した。

しかし、九月初旬に、黒田長政らが京畿道稷山で敗北すると、占領地を放棄し、朝鮮半島南部の沿岸に築いた倭城に篭城することとなった。

この撤退の理由は、李舜臣水軍の復活、兵糧不足、明・朝鮮軍の反撃、冬将軍の接近などであった。

降倭の将について

十二月二十二日、蔚山城外の日本軍勢の仮営が明軍五万七〇〇〇と朝鮮軍一万二千五百の急襲を受けた。

加藤清正は南に三十キロの西生浦城から急を聞いて駆けつけ、兵三〇〇〇とともに篭城に撤した。

この時、降倭の将岡本越後が降伏を勧める使者として登場する。

朝鮮記に、

「古へ加藤主計頭（清正）ニ仕シ。岡本越後守ト云者。去子細有テ日本ヲ出奔シ。年頃大明ニ住シテ。今度蔚山へ向ニハ八千騎ノ大将ニテ来タリケルカ。彼ヲ二人ノ王ノ大使トシテ。今日巳ノ刻計ニ」

吉川家譜に、

「騎馬ノ兵二人城近ニ来り、日本ノ言語ニテ我等ハモト岡本越後守ト称シ加藤殿ノ家人、一人ハ田原七左衛門ト称シ宇喜多家ノ人ナリ。…。今城兵計ルニ、二万余、寄手ハ明・朝鮮ノ兵百万ニ余、我等両人ハ昔ノ好ミニテ来ル、早ク和睦シテ城ヲ明渡サハ、城兵悉ク恙ナク帰スベシト告ケレハ…」

とある。

降倭とは明・朝鮮軍に投降した日本の将兵のことである。

文禄二年一月の平壌の敗戦までは少なかったものの、異国の寒冷な風土、兵糧難、無事に祖国に帰還できるかとの不安感などで、五月頃から進んで投降する将兵が増加したのである。

文禄三年になると、日本軍勢の分裂を狙って投降工作が盛んに行われた。

特に加藤清正、小西行長の陣営には投降工作が集中した。投降した兵は、文禄・慶長の役をつうじて数千人、あるいはそれ以上とされている。

降倭の将沙也可の死後百四十六年に子孫が刊行した「慕夏堂文集」によると、『文禄元年四月、加藤清正の先鋒将として釜山に上陸。数日して配下の兵を率いて朝鮮軍に投降した。この時二十二歳であった。

沙也可は鉄砲・火薬の製法を朝鮮軍に伝授した。この功績が最大であった。

文禄三年から慶長二年にかけては、蔚山城を拠点に、義兵を率いる郭再祐とともに、慶尚道沿岸の日本の軍勢を攻撃した。

沙也可の朝鮮名は金忠善。日本軍が撤退すると資憲大夫（正二品の下階）に、そして女真族の押さえとして、北辺防衛十年の功績により、正憲大夫（正二品の上階）の階号を加えられ、この後沙也可は友鹿村に隠棲し、寓居を慕夏堂と称した』

降倭の将として、毛利秀元の武将萱島元規、加藤清正の家臣岡本越後守、阿蘇宮越後、宇喜多秀家の家臣田原吉左衛門、朝鮮水軍の大将となった来島通総がいた。

日向記は蔚山城への明・朝鮮軍の攻撃について、次のように記している。

「加藤主計頭、蔚山ノ地ニ大明ノ大軍五十万騎襲ヒ来テ困窮ノ由、諸将悉ク十二月二十九日ヨリ進発シテ蔚山ヲスクワントス、翌慶長三年正月三日夜、江南人敗北スルニ依テ面々陣所ニ引退ク」

とある。

蔚山城攻防の戦いは一月四日、明・朝鮮軍が必勝を期して総攻撃をかけたが攻略できず、日本の救援軍勢の到着もあって、慶州へ撤退したのである。

この蔚山城の戦いについて、臼杵・太田一吉の従軍僧であった慶念の書いた「朝鮮日々記」を読むと、それは飢えと寒さとの闘いであったことがわかる。

「此城の難儀は三つにきわまれり、さむさ・ひだるさ・水ののミたさ」

「殿さま侍衆ハてき陣へかゝり、又ハきりぬけ候ハんなと、のあらましの御物語もあり。たゝとにかく爰こそ往生の所なれハ…」

同じく太田一吉の家来であった大河内秀元の「朝鮮記」にも、

「味方イヨイヨ水ナシ。馬ノ尿、己ノ尿ヲ飲ミ渇キシノグ。食イ物ナクバ兵ヨワリ、明軍ノ攻撃ヲ防ギヨウモアラズ。必定明日ハ城落チ候ワン」

「底知レヌ寒サナリ。塀廻リノ者ノ中ニハ、槍ヲ持ツタママ凍死スル者、マタハ銃ヲ握ル指ガ腐レ落チル者モ多数出ル」

蔚山城の戦いを切り抜けた朝鮮在陣の諸将は、一月二十六日に協議をし、東西に突出している蔚山城、順天城、内陸部に位置する梁山城の三城を放棄して、戦線を縮小し、防備を固めることを豊臣秀吉に請こととなった。

三月には宇喜多秀家、毛利秀元、蜂須賀家政ら中国・四国勢が帰国を命じられた。

日向記には、釜山浦城に在陣していた折、伊東と毛利勢との喧嘩について記している。

「当家ノ輩喧嘩ヲ仕出シ、毛利ノ者祐兵主ノ船手ノ者ヲ海ニ追籠由注進ス。落合九兵衛ラ槍ヲ合ス、田爪勝左衛門ラ三人討死シ、十数人手負出来ヌ。寺沢志摩守大将中ニ入セ玉ヒ和睦トナリヌ」

豊臣秀吉死去

八月十八日、豊臣秀吉が伏見に没した。六十二歳であった。

九月五日、豊臣秀吉の喪を秘して、徳川家康、前田利家らは朝鮮在陣諸将に帰国させる決定を出し、浅野長政、石田三成に博多で朝鮮から帰国の諸将を収容することを命じた。

朝鮮への使者としては、徳永寿昌らが派遣された。徳永寿昌らは十月一日に釜山浦に到着した。だが、使者が携えた手紙には、秀吉の死去には一切触れず、むしろ快方に向かっていると書付を示し、在陣諸将に明・朝鮮との和解を講じて帰国する事を命じるものであった。

日向記にも、

「徳永式部卿、宮本長二郎上使トシテ御朱印ヲ持参シ、同（慶長二年）十一月十五日ヲ限リニ帰朝ノトモツナ（艫綱）ヲトクベシトアリ、其時ノ御内書ニ云」

とある。

しかし、八月末には、豊臣秀吉は死去しているとの風聞が朝鮮軍に伝わっていたとされている。

この風聞に明・朝鮮軍は勢いづき、九月下旬から十月初め、明・朝鮮軍三万六〇〇〇が、蔚山城、泗川、順天城に攻め寄せ、日本の軍勢は苦戦した。

日向記にも

「釜山浦城在番ノ時、江南人大勢競来テ釜山浦ヲ取巻、七人ノ大将ヨリ三十人宛差出相防、祐兵主手ヨリ稲津掃部助ヲ大将ニ相戦、江南人三人ヲ討捕、借屋原運平、吉野二郎三郎討死ナリ」

とある。

朝鮮在陣の諸将の撤退については、十一月二十三日に、加藤清正、鍋島直茂、相良長毎、黒田長政、毛利吉成らが釜山を発した。

十一月二十六日に小西行長、大村喜前、寺沢広高、立花宗茂、宗義智らであった。

十二月十日、島津義弘が博多に到着した。

これにより日本軍勢の撤退帰国が終った。

日向記には、伊東勢の帰還について次のように記載してある。

「十一月二十四日未明ヨリ釜山浦ヲ船出アリ、二十五日ニ対州（対馬）ニ着岸シ、二十六日ニ壱岐ノ風本（勝本）ニ着、十二月筑前国博多ニ帰津（入港）シテ二十日余逗留アリ、於慈殿下ノ訃音ヲ聞キ玉フ、祐兵主ハ殿下ノ遺物トシテ備前恒弘ノ御太刀ヲ賜ル。是ヨリ祐兵主惣人数ヲハ国許ヘ返シ玉ヒ直ニ上洛有テ御越年なり」

日向記巻第十二・稲津掃部出頭事に、

文禄二年七月、熊川城に在陣の折に起こった伊東祐兵を廃し、嫡流の伊東義賢を奉立しようとの謀反の後始末があったことを記している。